Title	育ちを支える絵本の力 ： スーザン・バーレイ『わすれられない おくりもの』より」報告（【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト ： 第2回子どもの育ちと絵本研究会）
Author(s)	蘭，暁栄
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 28-30
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4954
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト　第２回子どもの育ちと絵本研究会

「育ちを支える絵本の力―スーザン・バーレイ『わすれられない　おくりもの』より―」報告

2013年11月30日（土）聖学院大学４号館にて、第２回絵本研究会が開催された。「育ちを支える絵本の力―スーザン・バーレイ『わすれられないおくりもの』より―」と題して、保育学の佐治由美子特任講師（聖学院大学人間福祉学部児童学科）より、人間の営みとしての保育を絵本に読むという、斬新な研究発表があった。

絵本を読むことは、その声を介して参加者が互いの息づかいを感じあうことでもある。そこで、おはなしボランティアの室伏加代子さんに朗読をお願いし、絵本の解説と朗読とが交互に重ねられていく形式の発表が行われた。なお、司会を寺崎恵子准教授（聖学院大学人間福祉学部児童学科）が務めた。

はじめに

スーザン・バーレイ『わすれられない　おくりもの』（小川仁央訳、評論社、1986年）（Susan Varley, Badger's Parting Gifts, 1984）は、小学校３年生国語の教科書『ひろがる言葉』（教育出版）や、小児科医　細谷亮太氏の『いのちを見つめて』（岩波書店、1998年）にもとりあげられている。作者スーザン・バーレイが23歳のとき、美術学校の卒業制作として作り上げた作品である。親しい人の死という難しい内容でありながら、世界中で親しまれ、広く読まれている絵本である。

この作者は、保育を仕事にはしていないはずである。けれども、この作品には、保育の在り様そのものが文と絵に見事に描かれている、と保育学を専門とする発題者は指摘する。発表者は、小川仁央訳を離れ、原書の文と絵から保育の視点に立った翻訳を試みたという。以下が、その改訳に基づく発表内容である。

Ⅰ「アナグマのバジャーさん」という呼び名

杖をついて丘を登ってきたバジャーさんが、切り株に腰掛けている。ここからこの物語は始まる。切り株に刻まれた年輪とバジャーさんの生き方が重なり合っている。森の仲間たちは、この年老いたバジャーさんを頼りに暮らしてきた。こうした関係性をふまえ、“BADGER”の名を、小川訳の「アナグマ」にかえて「アナグマのバジャーさん」と訳してみた。森の仲間たちの親しみを感じさせる呼び名にすることによって、「わたし」と「あなた」という二者関係を浮かび上がらせようとしたものである。このような二者関係は保育における基本的な関係を意味するが、なにより聴き手である子どもたちにとって身近な呼び名であることを願った。

Ⅱ　バジャーさんの身体に起こる変化と保育の営み

仲間のかけっこを見ているうちにバジャーさんのからだに変化が生じたことを、二枚の絵から読

発題者：佐治由美子特任講師（上段）

みとることができる。遊びの楽しさは、それに触れるものにも活力を与える。小川訳にある「しあわせな気持ちになりました」という表現は、一歩下がって子どもを見守る保育者の姿勢を表す。しかし、保育者は、子どもの遊びを見ているだけで、その感覚を共有しうる存在でもある。その意味から、この訳は「自分もたのしくなってくるのでした」と置き換えてみた。保育者には、瞬時に遊びの世界に没入して融解する「溶解体験」が起こることも事実である。しかしまた同時に、その状態から出る・引く・冷めることも、保育者として重要である。保育を学ぶ人には、子どもに触れることによって体感的に、子どもの世界に入ったり出たりするこの感覚をつかんでもらいたい。

Ⅲ　バジャーさんの腕と足

切り紙を成功させた喜びにひたるモグラを包み込むような、あたたかさ溢れるバジャーさんの両腕の表情は、子どもの喜びや悲しみを抱きとめる保育者のからだに通じることである。モグラの目の前にできあがった作品を広げて見せるときのバジャーさんの様子は、モグラとずっと一緒に過ごしてきたからこそ、その喜びの瞬間に立ち会うことができたことを表している。保育者は、子どもの育ちの大事な一瞬にからだごと入り込んで、その喜びを共有するのである。

Ⅳ　手をつなぐ

バジャーさんの手の繋ぎ方は、保育において大切な点を示している。スケートがまだうまくないカエルは、バジャーさんが手をつないで一緒に進んでくれたペースを、心地よく感じていたのだろう。その様子が絵にも文にも見事に表現されている。「待つ」ことは、子どもの成長に必要な時間を意味している。育ちを待つところには、子どもの成長だけでなく、それに伴う大人の成長が表裏一体となって豊かに与えられる。そこに、私たちは希望を抱いていたい。子どもに寄り添うことは、

研究会風景

大人の忍耐が求められることというよりもむしろ大人の喜びが与えられることであり、大人に示される希望そのものなのである。

Ⅴ　ネクタイを結ぶリズム

ネクタイを自分で結ぶのが難しいキツネに、バジャーさんは一緒にやって見せながら結び方を教えている。そのリズミカルな動きを、バジャーさんの右足の表情に感じとることができる。子どもたちに新しいことを伝えるとき、それを実にリズミカルに表現する保育者の姿そのものである。そのリズムは、保育者が語る言葉より保育者のからだの動きに表出される場合が多いことを、一枚の絵が的確に表現している。

Ⅵ　学ぶ者が主体となるとき

ショウガパンの焼き方という技術を教える時にも、バジャーさんは相手に寄り添う姿勢を変えていない。バジャーさんの肩から腕にかけての身体のラインに、ラビット夫人を包み込むようなあたたかさが感じられる。保育者のあたたかさは、背中から肩にかけて表出されることが多い。ラビット夫人は、バジャーさんのあたたかさに包まれることで、学びの主体となることができたのだろう。その学びのエッセンスが、焼き立てのショウガパンの香りとなってラビット夫人の鼻先にいつまで

も残っている。真の学びとは、学びの空間全体に漂う雰囲気の総体として起こることを、この場面は示唆している。

まとめ

バジャーさんに育まれた森の仲間たちは、バジャーさんを失った悲しみを一人ひとりが受けとめた上で、互いにその悲しみを支えあう仲間として成長した。「わすれられないおくりもの」は、森の仲間たち一人ひとりに贈られた目に見えない成長の糧であったといえる。しかしその「わすれられないおくりもの」は、森の仲間たちを成長させるために与えられたのではなく、結果として森の仲間たちを育てる存在としてバジャーさんが“生きた”という事実が、バジャーさんの死後にみんなの心に残されたと考えてみることができるのではないだろうか。保育者は、その育てる行為において相手を豊かにすると同時に、その人自身が育てられ豊かにされる、そのような関係性の中を生かされる者たちだからである。

また、この作品は、読み手と聴き手の両者に、それぞれの育ちを祝福する力を備えている絵本として提供される。バジャーさんから森の仲間たちへの贈物であったはずのものが、神様から深く愛されたバジャーさんという存在を通して、読者である私たちに与えられた、神様からの贈物（Gift/Gabe）でもあるのではないだろうか。

子どもたちは大人の所有物ではなく、与えられた人生を自分の生き方において開いていこうとする人たちである。保育者は、そのような子どもの成長のための媒介者（mediator）なのであり、育てるその行為において、保育者自身が人として育てられ豊かにされる。このような保育の真実を、この絵本は私たちに静かに語りかけてくれる。

この絵本を通じて、保育者と子どもの関係について深く理解し、子どもの成長をどのように支えることができるのかを学ぶことができた。室伏加代子さんの美しい声に魅了されながらの映像資料とその解説は興味深く、参加者一同で大いに楽しんだ。私たちの鼻先までこの美味しそうな焼き立てショウガパンの香りが漂ってくるような、そんなひとときであった。

（文責：蘭暁栄［ラン・ギョウエイ］聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程２年）
（補足：寺﨑惠子［てらさき・けいこ］聖学院大学人間福祉学部児童学科准教授）
（補足：佐治由美子［さじ・ゆみこ］聖学院大学人間福祉学部児童学科特任講師）